

**論文題名：**日本における新華僑一世のライフスタイルに関する考察

**主査教員名：**山本 須美子

**研究科・専攻・学年：**社会学研究科・社会学専攻・博士前期課程2年

**氏名：**樊海涛

### **研究背景：**

法務省入国管理局のデータによると、2007年の時点で在留中国人の人数はこれまで日本における最大の外国人グループであった在日朝鮮・韓国人の人数を超え、一位となった。2016年6月末の在日中国人数は72,8479人である。帰化人口をも考慮に入れると、さらに大きな数字になるだろう。中国人にとっては中国国内での移動であっても、地域が変われば、言葉、風習などが随分と違ってくるので、出国するのとほとんど変わらない。これは中国人が出国することを厭わない要因の一つだと指摘されている。

1950年から1972年にかけて、日本における華僑・華人の総数は5万人レベルを維持していたので、現在の在日中国人のほとんどは改革開放後に日本に渡った新華僑であるということが伺える。日本における新華僑は量的にも、質的にも、もはや無視できない存在となったが、戦前に日本に移った老華僑の研究と比べると、新華僑に焦点を当てた研究は極めて少ない。

数少ない新華僑研究の中で扱われているのは経済、ネットワークや政策面といったマクロ研究がほとんどである。在日中国人が70万人を突破した今日でも、彼らは日本社会にとって未だに見えない存在であると指摘されている。新華僑の実態を明らかにするためには、ライフスタイルという概念が有効である。

### **研究目的：**

本論では、日本における新華僑一世に焦点を合わせ、彼らの生活実態を解明することによって、在日新華僑一世の①ライフスタイルの形成、②変容プロセス、そしてその背後に隠れている③行動指針としての価値観を明らかにし、さらに④それと新華僑一世の社会適応、アイデンティティとの関係を論じることを目的とする。

ライフスタイルの考察というのは、即ち、ある人生段階での衣・食・住といった個人の生活面全般が含まれる。従来の文脈では、社会学におけるライフスタ

ル研究は集団重視であり、心理学におけるライフスタイル研究は個人重視であったが、本論ではこの両面の統一を試み、社会階級など集団性の強い要素から形成された観測可能な、パターン化した日常生活の特徴を重視しながら、新華僑個人が能動的に決定できる生活の側面も視野に入れる。これに加えて、生涯発達論的に個人におけるライフスタイルの変遷も考察の一環とする。

### 調査概要：

調査方法としては参与観察法と半構造化インタビュー法を用いた。調査期間は2016年4月から2017年7月までとなる。調査内容は新華僑集住地域として知られる東京都豊島区池袋と埼玉県川口市におけるフィールド調査、首都圏の7つの新華僑ネットワークへの参与観察、そしてWECHATなど在新華僑の間で日常的に使われているSNSアプリを活用し、ランダムに抽出した新華僑一世とフィールド調査で知り合った新華僑一世の合計41名に対するインタビュー調査からなる。分析方法は事例分析法とM-GTA法の併用である。

### 論文構成：

第一章では世界と日本における新華僑の歴史的背景を資料から概観し、論文に関わる先行研究を①地域を限定した研究、②アイデンティティ研究と③ネットワーク研究という三つの類別に分けて整理した。先行研究がライフスタイルという個人における主体性のパターンを考慮していないという点を指摘した上で、本論はライフスタイルを中心とした視点を明確にした。第二章ではまず用語の定義を明確にして、調査概要を述べた。第三章において池袋と川口市という二つの新華僑集住地域の概況を主に先行研究の資料を整理する形で紹介した。第四章では新華僑ネットワーク形成の場の事例を7つ紹介し、対比分析を行い、初歩的論考を加えた。第五章は新華僑一世個人のライフスタイル事例を4つ取り上げた上、事例ごとに概念を抽出し、共通点や関連性のある部分を指摘した。そして、個人事例を比較検討し、ネットワークと個人との関係を論じた。また、四章と五章は共にライフスタイルの具体例として見る事が可能である。その補完として、第六章において、ライフスタイルを抽象的に取り上げ、時間的次元と空間的次元に分けて、M-GTA法による41名の新華僑一世への総合的な分析結果を関係図で示し、ストーリーラインを用いて説明を加えた。6.1節ではライフスタイル、6.2節ではライフスタイルと社会適応との関係、6.3節ではライフス

スタイルとアイデンティティとの関係を分析した。

### 結論：

本論の独自性は、ライフスタイルの再帰性を時間的次元と空間的次元に分けて検討することによって新華僑一世の多様な行動様式を考察し、さらにライフスタイルと社会適応、アイデンティティの関連性を析出することにあつた。新華僑一世個人のライフスタイルは多様性に富んでいるが、共通している部分を抽出した上で、時間的次元での考察から①日本型ライフスタイル、②維持型ライフスタイル、③第三の文化型ライフスタイル、④トランスナショナルなライフスタイルの四つに類型化できた。

空間的次元の視点からみると、居住環境とネットワークがライフスタイルに影響を与えていた。ネットワークに関しては、従来の「実体のある」off-lineのネットワークから「実体のない」SNSを介するネット上のネットワークへの移行という現象を在日新華僑に見出すことができた。

次に、ライフスタイルと社会適応との繋がりを考える上では、コンフォートゾーンの存在が重要であつた。時間的次元ではコンフォートゾーンからの脱出あるいは依存という志向が析出された一方、空間的次元において新華僑一世は誰しも不可避免的にコンフォートゾーンの内部と外部との相互作用を日常的に経験していた。時間的次元において、能動的戦略選択があつたことと対照的に、空間的次元では外的要因に決められた部分が大きかつた。コンフォートゾーンの内部で観察された新華僑一世の匿名性と、コンフォートゾーンの外部で観察された新華僑一世の諸特性（①見えない存在、②通用名の使用、③ファッションの変容）であつた。適応戦略としての行動は、ライフスタイルとして定着することが多かつた。

ライフスタイルとアイデンティティとの関係については、アイデンティティの危機が生じる時点からアイデンティティの再確認までの期間中に、ライフスタイルとの相互作用を確認できた。一方、空間的次元の視点から見ると、中国への旅行はアイデンティティの再確認にとって意義のある行動であつた。中国への旅行が重なるにつれて、ライフスタイル化して、主体的に定期的に行うケースが少なくなかつた。情報技術の発達従来は従来の空間概念を一変させたものの、中国への旅行という物理的な移動は依然として重要な役割を担っていた。外的要因によって中国への旅行が阻害された場合は日本への適応、アイデンティティの統

合に悪い影響を及ぼした。

以上から、新華僑一世の日常生活は、日本で新しく構築した友人ネットワークと居住空間によって定型化し、コンフォートゾーンへの依存と脱出は、ライフスタイルの維持と変容の要因となっていた。ライフスタイルは外的な要因に規制されつつも、新華僑一世が主体的に構築できる部分も大きく、日本での経験から生じた価値観の変容は社会適応、アイデンティティとの相乗効果を受けながら、再帰的にライフスタイルに作用していた。